

Robert Schleip, 他(著)／竹井 仁(監訳)

人体の張力ネットワーク

膜・筋膜

最新知見と治療アプローチ

評者 黒澤和生

国際医療福祉大学小田原保健医療学部

このたび、竹井仁先生監訳『人体の張力ネットワーク 膜・筋膜—最新知見と治療アプローチ』(Fascia: the tensional network of the human body)が医歯薬出版から出版された。筋骨関節系の疼痛と変調を扱う治療家にとって fascia(以下、筋膜)ほど謎多き組織はないであろう。

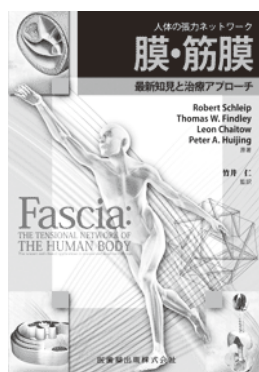
竹井先生は、15年ほど前から日本徒手理学療法学会主催の筋膜リリース講習会を開催している。筋膜リリースには、① Osteopathy から始まった筋膜リリース、② 理学療法士の John F. Barnes が発展させた新たな筋膜リリース、③ Luigi Stecco が提唱する筋膜マニピュレーションの流れがある。竹井仁先生は、1995年 Myofascial Release I・II (John F. Barnes のコース)、The Upledger institute (Osteopathy) の CranioSacral Therapy I, Strain and Counterstrain I・II や Muscle Energy コースから始まり、2012～2015 年にかけて、Luigi Stecco の講習会 (Fascial Manipulation Level I, Fascial Manipulation Level II・III) も修了されており、日本における筋膜治療の第一人者である。

最近、この筋膜研究の成果が明らかにされてきており、新たな展開をみせている。原著者の Robert Schleip 博士は、ウルム大学で筋膜について共同研究を実施し、研究成果を著書のなかに示している。筋膜は、組織をつなぎとめる詰め物と考えられていたが、生体にストレスが加わると、筋とは独立して筋膜自体が収縮をするという。ハイデルベルグ大学において、筋膜に受容器や神経終末が密に分布していることも明らかにされた。また、腰痛を有する人の腰部筋膜は明らかに肥厚しており、柔軟性の欠如、疼痛増強や違和感、関節機能障害が認められた。

各章の概要をみると、第1部では筋膜の解剖学と生理学、第2部では臨床応用(筋膜関連の障害、評価、治療)、第3部では研究の方向性(画像診断、先

進的 MRI 技術)について述べられている。興味深いのは、第1部のパート4「筋膜組織の生理学」において、「膜・筋膜は生きている」と題する章があることである。結合組織内にある細胞がどのようにして筋膜組織の緊張性と体系を調整するのかという点は、治療家にとっては最も興味深い部分である。これまでの筋膜以外の組織研究では、線維芽細胞が、 α -smooth muscle actin (SMA) を発現する筋線維芽細胞に分化することが知られており、内臓(腎、肺)などの硬化を来すとされている。筋膜においても筋線維芽細胞の収縮によって組織拘縮が引き起こされるとなれば、治療家の筋膜に対する戦略も大きな展開が期待されることになる。

本書が理学療法士のみならず他の医療関係者の知識と技術を高めるバイブルとなることが期待される。ぜひ、手にとって内容の深さを実感してほしい。



B5判・576頁・1色刷
定価：本体10,000円＋税
医歯薬出版刊、2015年